

昭和五十四年八月二十三日 第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三五〇号）

次

目

近角常音先生御講話……………	大字三右エ門記……………	(1)
歎異抄のすすめ(六)……………	田村実造……………	(6)
聞信録抄……………	菅田豊吉……………	(11)
私の詩と信仰……………	木村無相……………	(14)
おかげさま……………	まつもと・ときを……………	(20)
不請之友……………	花田正夫……………	(21)

慈

光

第三十卷

第八号

近角常音先生御講話

大字 三右エ門 速記

(昭和二十七年四月、御自坊において)

昨日から歎異抄の最後の結文の御主意についてお聞きしてもらつてもありますが、段々年を取るにつけ、心の中ではああも、こうも思うのであります。それが自由にお話し申し上げることができませんが、この結文の御主意をお聞きとりたいのは、私も年を取りますにつけて、中々他力の信心の趣きが、人様のおこころの中に落ちつかないことがいろいろ気になりまして、それ故、お互に聖人の仰せ下されたお心持の程をよくよくいただくかねばならぬと思ひます次第であります。

昨日はあまり多岐にわたつて聞いてもらいたいと思ひまして、そのためかえつて不得要領なお話になってしまひました。今日はこの結文だけをお聞き頂こうと思ひます。

さて、歎異抄は前後十八条あります。前文九条は聖人直々の仰せで、これは大切な証文、大切な信仰上のよりどころとなるべき個条であります。後の九条の異端、当時の人

々が信仰上で色々と善悪、是非してめいめい勝手なことを申している。それを聖人の仰せと照らして、かくかくこうして間違ふのだ、ここが取り損ないのだと指示し下されて、終に最後のこの結文を誌さずには居られなかったお心持というものは一様の思召しではなかったであらうと思わせていただきます次第であります。それ故に、

「右条々はみなもて信心のことなるよりことおこりそうろうか云々」

と、各自色々言うものがあるが、例をあげると、

「自然に腹をも立て惡しざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をもしてはかならず回心すべしということ云々」

と、謝りはてねばいかぬという者がある。こんな妙なことはない。こんなことを考えるのは「善いことをしようとするればどれだけでもできる、又反対に悪いことをやめようとするれば思いとまれ」と、そんなことをいうているが、それが誤りである」と、それを歎異抄は仰言っている。

私など本抄を十二、三才の頃から読んでいた。求道学舎では、朝の勤行に学生が読んでおります。私は三十一才まで仏様のことを分らせてもらえなかつた。それまで聞きながらどう思うていたかと言いますと「悪いことにつけて頭をさげてお慈悲に立ちかえつて南無阿弥陀仏々々とあやまりはててゆくのが他力信仰にかなう」とばかり思うていたのであります。

皆様はどうですか。向うさまから、そうで無い「回心できぬ、それだから捨てぬ」というて下さっているのに、こちらは回心々々と思うている。それ故、私なども三十すぎまで分らせてもらえなかつた。

そのように読んでいると歎異抄はちよつとも分らせてもらえぬのである。横着をする、せない。謝る、あやまらねばならぬ、と考える。謝れば善い事をしたように思う。回心する、申しわけない。又回心する故自分は心得がある、立派と思うてしまう。我々というものはそれだけしかない人間である。それだから仏様が捨てぬと仰せあるではないか、と申したいのである。まあこれだけ申しただけで今日のお話を終りにしてもよいようなものであります。

0
ああ、何と申しますか、今時の本願寺のお話は、信心深めて喜ぶことと、こちらからいきむばかりになる話になりやすいのであります。

私、今日もお話申しましたように、兄貴からずい分お話を聞かしてもらつたのでありますが、七十才で死にました。

最後、晩年は脳溢血で倒れて人様に聞いて貰えなかつたけれども、それ故最後の十年は別としても、その余の間は全体的にお話を聞いてもらいました。そして、悪凡夫をお見捨てないのは仏様ばかりと、これだけ、こればかりお話ししてきました。これ以外に兄貴の話というものは無かつたのであります。これを五十年間聞いてもらいましたわけですから、それなのに、兄貴の死後になつて、話を聞いた人が、兄貴の申した「仏のお見捨てない御真実のかたじけなさばかり」では感心できぬ、もっと何とかなる事にはかり走つて兄貴の申した主旨を取り違えている、ああだ、こうだと信心と学問とひつついて来る。これだと兄貴の申したことに違ふ。それは何故か、

「信心の異なるよりことおこりそうろう云々」

このためである。

歎異抄を唯円房様が書かれたということは、おおごとであります。唯円房の御苦心おもうてこのように申上げておるのであります。

祖師聖人は関東よりご帰京後も、お子様の善鸞様からして、そのように各方面に異論が起つたのであります。それにつけても、めいめい仏のお真実(まこと)を本當にいた

だいているかどうか、よくよく考えて見ねばならぬと思います。

「故聖人の御ものがたり、法然上人の御とき、御弟子その数多かりけるなかに、同じ信心の人もすくなくおわしけるにこそ。」

ご承知の通り法然上人御年七十五才にもなられてからご流罪におあいなされた。上人の京都においでの際は、御弟子も多かった。熊谷蓮生房などは武士であったが御弟子になつて仏道に入つて深く喜びなされた。それ程沢山お弟子があつたけれども、それらの人々が同一信心とばかり言えない。これは現在も同様である。聖人はここで当時のことを思い出されてのお話であります。

「親ら、御同朋の御なかにして御相論（ごそうろん）のことそうらいけり」

かく信者は多かつたけれども信心はまちまちであつた。

「その故は、善信が信心も上人の御信心もひとつなりと仰せそうらいければ云々」

この相論というものは思いもかけないことで、聖人としては随分と思ひ切つた事を仰せられたものである。即ち自分の信心もお師匠のご信心も一つ、同じと仰せられた。聖人が一つなりとかく仰せられたのは、信心をいただいたてい

る、いただいていないの、やぐい話でない。よくせきのことであつた。これを聞いた周囲のお弟子たちは承知しない。そんなことがあるものかと勢観房、念仏房などのお歴々が目を三角にして、ひたひたに青筋たてて

「もてのほかにあらそいたまいて、いかでか上人の御信心に、善信房の信心一つにはあるべきぞと候いければ」

いかでか弟子の信心とお師匠の御信心が一つであるべきかと云いたてた。そこで聖人は

「上人の御智慧才覚ひろくおわしますに、一つならんと申さばこそ、ひがごとならめ」

と、御師匠と御知恵や才覚が同じと云えば間違ひなるも、徳も高く、博字のほまれは天下に聞こえたお師匠と同じと申すなれば、それは誤りであるけれども

「往生の信心においては、またくことなることなし」と仰せられた。そのように、兄貴の信心と皆さんの御自身の信心と一つだと自信を持つて言いされるものでなければならぬのであります。しかし、

「なお如何でかその義あらんという疑難ありければ、せんずるところ上人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細を申し上げければ、源空が信心も如来よりたまわたりたる信心なり。善信房の信心も、如来よりたまわらせたまいたる信心なり。さればただ一つなり」

法然上人はかく善信房の信心も手製でない、いただいた信心である、どちらの信心も一つであると判言を押してしまわれた、ただ一つだとキツパリ仰言つた。

これはえらい仰せです。別の違つた信心の人は、同じ浄土へはまいらせていただけまいとまで仰せられた。自力のはからいでまいれる浄土でない、如来建立のお浄土である

願力成就の報土には、自力の信行いたらねば

大小聖人みなながら 如来の弘誓に乗ずなり

と、自力の信行、数多く念仏称えるという具合に自分でこしらえた信心ではあかぬ。それらの人々も自力ではまいれる浄土ではない。大小聖人みなながら如来の弘誓に帰してこそまいらせていただけるのである。お師匠と弟子のお前が同一に往生できるものと云うけれど、自分で行けぬゆえに、仏様がお力を加えて連れて行つて下さるのである。

「別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へはよもまいらせたまひ候わじと、仰せ候いしかば、当時の一向専修の人々の中にも、親鸞のご信心に一つならぬ御事も候らんとおぼえ候」

ここで御文の意がぐるっとまわっているであります。源空がまいれるお浄土へはまいられんであろうと仰言つた。ここぐるっとひっくり返つてくる。

聖人御在世当時の一向専修の人々の御中にも、聖人の信心と一つでないこともあつたと、唯円房が御在世の當時をしので、このように思われると言われた。それが現在聖人御滅後と同じように行われている。これはまことに歎かわしいことであるとの唯円房の述懐である。

「いずれもいずれも繰りごとにて候えども、書きつけ候なり。露命わずかに枯草の身にかかりて候ほどにこそ、相ともなわしめたまう人々、御不審をうけたまわり、聖人の仰せの候いし趣きをも申しきかせ参らせ候えども」長々とくどいけれども書きつけたのである、それというのでも枯草に露のかかったよう身であつてみれば、この露の息のかかっている間は、色々のおたずねに答えることも出来、聖人の仰せられた趣旨をおきかせ出来るけれども、自分もかく年をとるにつけ何時死んでしまふやも知れぬ、それを思うとまことに心許のう思われる。

「閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてそうらわんずらめと、歎き存じそうらいて」

自分が眼をつぶつたのちは、ああこう滅茶々々になつてしまふであろう。ああ歎異抄の筆つきがここぐるっと変わる。自分が閉眼してしまえば、真と偽とまぎれてしようのないことになつてしまふであろう、このことはまことに残念でしようがない。昔も今も、聖人の仰せでないことを仰

せと云いまぎらかす、色々言い立てていたゆえ惑った。

「かくの如き義ども、仰せられあいそうろうひとびとにも、云いまよわされなんどせらるることのそうらわんとき、故聖人の御ころにあいかないて、御もちいそうろう御聖教どもを、よくよく御覧そうろうべし」

かく間違つたことを聞くにつけ、あれかこれかとまどう時には、今は亡くなられた聖人の御心になつて用いられた御聖教をよく読めとあります。

法然上人の書かれた『選択集』などは聖人が大変およろこびなされて読んでおいでになつた。また『唯信抄』や『後世物語』『一念多念分別事』等をよくよく読まぬと飛んでもないところへ迷いこんでしまうと書かれてあるのであります。

現在など、本願寺のお説教はどうなっているのか知りませんが、地獄極楽などの話となれば、若い人達はそんなこと信じられぬと色々言うています。これらの事につけても「おおよそ聖教には真実権仮あいまじわりそうろうなり権（ごん）を捨て実をとり、仮（け）をさしおきて真をもちいるこそ聖人の御真意にてはそうらえ」

権と仮は、真実を解りやすくするために仮（かり）のこととも書いてあるが、本当の真実というものをよく見きわめねばならぬ。言いかえると、方便化土というところがある

歎異抄のすすめ（六）

——道を求める若い人びとに——

本講の第一回のはじめにも申しましたが、歎異抄はその構成を大きくわけると、第一条から第九条までの前段と、第一〇条から第一八条までの後段との前・後二部から成っております。これを演劇（しばい）にたとえますと、前段の第一幕は九場から成り、その主役は親鸞聖人ですが、後段の第二幕九場に移りますと、主役はかわつて唯円房になり、聖人はワキ役かつレ役になります。そして第二幕は、シテ役の唯円房クドキが多いため各条の文章が長くなつてきます。

もっとも、ここでことわっておきませんが、第一条のはじめ一・二行目に

「念仏には無義をもつて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆえに、とおおせそうらいき」

とあって、聖人のことば——この語は「末灯鈔」などには法然上人のことばとされている——として直接法的書式

が、そのような処へまいらぬよう、本当のところをとるのが、聖人の思召にかなうものである。

「かまえて、かまえて聖教をみだらせたまうまじくそうろう」

どうか、しっかり見きわめるべし、とりみだしてはならぬ「大切の証文どもぬきいだしまいらせてこの書に添えまいらせそうろうなり」

全体、歎異抄などの大切な聖教には深い意味のことがこもつてあるから、よく注意せねば読みちがえたり、意味を取り違えてしまう。それ故肝要な証文となる御聖教を少々抜き出してこれに添えて置くとあります。

私など子供の時からお聖教を読んでいたものでありますが、つい見損うてしまつて本当のことがわからなくて、どうだ、こうだと詮議することがありました。そうであるから本当のところをいただきして貰わぬといかぬと思うのであります。

さてあとまだ申したいのでありますなれど、午後また聞いていただこうと思ひます。

田村実造

ですので、一部の学者は、第一〇条までを前段としている人びともあります。しかしわたしは、この一文は後段の序、つまり第二幕九場の口上（こうじょう）のようなものだと思ひます。第一幕では第一条が口上であり、第二条から本番であるのに対応して、第二幕では第一〇条の前引の「念仏は無義をもつて義とす。云々」が開幕の口上であると考えます。

さて、この「歎異抄のすすめ」は、前回の第五回目まで第一幕九場を終えましたが、読者のみなさんも少しいたくつなさつたのではないでしょう。このへんで幕間（まくあい）の休憩をしばらくしたいものです。そこで中休みに入りますまえに、これまでの解説をふまえて聖人の思想的発展について、かねてからの私なりの考えを少々述べさせていただきます。

聖人の九十年の生涯をみますと、(1)求道時代(叡山)

(2)法悦時代(吉水)

(3)流寓時代(越後)

(4)自信教

人信時代(関東)

(5)著述時代(京都)の五期に大別で

きます。(1)の叡山での求道・修行の時代は、みなさんも充分に承知のことでしょうから説明する要はないでしょう

(2)の法悦時代は、二十九才で山を下り、雑行をふりすて善知識法然上人の吉水道場で回心して、法悦にひたった六カ年(29才―35才)にあたりますが、求道の時期が二十年にわたる長い身・心の苦しみであったため、本願他力念仏に救われた聖人の法悦は、それだけに、天にかけり、地におどるほどであったとともに、その喜びは吉水道場にあった数年間つづいたことと思います。

当時の吉水道場は、おそらく貴賤老若の男女にあふれ、かれらの唱える念仏の声にわきかえっていたことでしょう。それは南都・北嶺をはじめ聖道門の人びとには、法然上人がたと七カ条の起請文をもって弁明につとめても、仏教者としての戒行を捨て、あるいは仏教者として慎しまねばならぬ女犯の戒にそむく、許されまじき行為と見えたことでしょう。事実、やがて法然・親鸞の両聖をはじめとし流罪・死罪の法難の因をつくった女官の松虫・鈴虫の事件(第二条の歴史的背景の項参照)も、このようなふんいきの中から発生したのでした。おもうに、聖人と玉日姫と

の結婚説も、やはりこんな素地(したぢ)の上にできあがったものと思われれます。したがって、この時期の聖人には、師の房(法然上人)の下で法悦にひたりながら他力の念仏を行ずる以上に、より深い内省・思索に入る心の余裕もなく、また環境でもなかったと考えます。

(3)越後国流寓時代(35才―42才)

この時期は聖人と

とって一大試練の七年間でした。一般には9才から29才までの山上の求道時代の苦難な修行が強調されますが、聖人の生涯のうち、いちばん苦闘された大切な時期こそ越後流寓時代だと思えます。この七年間に、聖人は思想的に法然上人をのり超えたのでした。信仰上からいえば、師の称名念仏を、回向の念仏へと昇華させていかれたと思えます。しかしこの越後時代は、聖人について語ってくれる史料は全くといってよいほど、残っていないのです。やむなくわれわれは、この時代に対しては歴史的推測を加えるほかありません。

さて、師匠や法友たちと別れての立出にあたって、聖人は「このたびの流罪により、じぶんが辺地の人びとに念仏を伝えることができるのは、ひとえに師の教えのたまものである」といって軒昂(けんこう)たる意気ごみが見えます。三十五才の血氣さかんな年ごろの身としては、当然のことです。ところが、海路、居多が浜に上陸してみて、あ

まりの荒涼さにまず一驚されたことでしょう。流謫地の国府(直江津)におちついても、僧籍を剥奪された流人の身は監視の眼もきびしく、とても地下人(ちげびと)に禁制の念仏を伝えるなどのような自由な行動はとれなかったはず。それにいま一つ考えられるのは、ことばの問題があります。越後は越(こし)の国といわれるように、当時としては、いわゆる文化果つるの地であり、方言学上からも糸魚川が日本人の方言を大別する分岐線であるといえますから、それまでは都から一步も出られたことのなかった聖人にとっては、この国の人たちの語ることばは、ほとんど通じなかったのではないかと考えます。しばらくは恵信尼公の通訳を要したでありましょう。このような条件下での念仏流伝などとはいえない思いもよらないことでしょう。

そこでかつて立出にあたって「辺地の群類を教化する」と心に誓ってこられたものの、ここにいたって聖人はその考えを百八十度転じて、じぶんの内なる群類(煩悩)をみつめるという自己内省に入られたのでした。入らざるをえなかった、という方があたっているかも知れませんが、健康の点では、越後の国は今日でも豪雪地帯といわれる厳しい気候の地でありましたが、幸にも叡山の山中で少青年時代を過ごされた聖人には、三十代の壮年期のことでもあり、さほどでもなかったかと思われれます。聖人は三部経は

もとより都から持参した多くの經典を読みかえしつつ深い思索の日を送られたでしょう。現在の人びとについてみても、三十代後半から四十代後半ないしは五十代前半ごろまでが、いちばんあぶらののった時代で、哲学・宗教・文学・歴史学などの人文科学系での学問的体系は、多くこの年ごろにでき上るといってよいでしょう。あれこれ考えあわせますと、聖人独自の宗教的論理の展開ともいえる三願転入―いかなれば、他力のなかの自力から他力のなかの他力(絶対他力)の世界への展開の発想も、おそらく越後時代であったでしょうし、したがって「教行信証」化身土巻や信巻などの構想も、それらの執筆は関東時代であるにしても、すでにこの越後時代に、りんかくはでき上っていたであろうと推定されます。

よくいわれることですが、法然上人は善導大師の「観經疏」にみちびかれ、他力念仏にめざめて浄土宗を創(はじ)め、親鸞聖人は法然上人の創めた他力称名念仏を、さらに回向の念仏にまで深めたと、わたくしは仏教学や真宗学には、しろうとすから難しいことはわかりませんが、浄土宗と浄土真宗とのちがいは、一口で申せば、さきにくった称名念仏と他力回向の念仏とのちがいが、すなわち称名念仏が、「末灯鈔」などにいういわゆる「他力のなかの自力」とすれば、回向の念仏は「他力のなかの他力」、絶対

の他力ともいえると思います。それは歎異抄に例をとれば、第三条の「善人なおもつて往生をとぐ、いわんや悪人をや」を、法然上人は「悪人なお往生す、いわんや善人をや」といわれていることのちがいになっています。また法然上人は「一念（一度の念仏）なを往生す、いかにいわんや多念（たびたびの念仏）をや」ともいつていられます。このことは、信一念の念仏と、その後廻心後（入信後）の念仏のいみづけとも関係します。浄土宗の学者から聞いたのですが、法然上人は信心決定（廻心）した以後の念仏については明確ないみづけと解答とを与えていられぬところ、ところが親鸞聖人にあるのは、廻心後の念仏は明らかに報謝の念仏であります。歎異抄第一条に

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたもうなり。云々。

とあるように弥陀の本願を信じることが肝要であり、信じることによって摂取不捨され、本願回向の念仏であることに気づく。したがって聖人の思想では、本願を信じることが主で、それによって回向された念仏が口から流出すること、救いの自覚廻心（信一念）が覚知されるわけです。文章やことばでは、このような手順でしか表現できません。

だち・茨城県）に一家をあげて移られました。聖人は念仏を伝えることを自信教人信（みずから信じ、人びとも信を伝える）、といわれているが、越後時代に深めた信心に立って、関東において教人信、人にも教えしめする生活になったのです。そして教人信によって、いよいよ御自身も他力の信心を深く喜ばれたのです。自信教人信は自利利他にも通じるわけです。

こうして関東の生活はおよそ二十年間つづけられたが、この間に面授の門弟は七、八十人―常陸の国の在住者だけでも四十五人―にも達しています。それに比して越後では覺善という弟子一人にすぎないことも、越後時代には他に對する活動がなかったことがわかります。歎異抄のあの簡潔でリアルな表現―それは唯田房によって多少練りなおされているかも知れませんが―は、そのほとんどが関東における念仏宣布のなかで語られたことばであります。「教行信証」も関東在住中、四十八才ごろから稲田の草庵で執筆されはじめたと伝えられます。しかし、この書のように、自己の信仰体験が複雑・精緻（せいち）な表現をもって論理化されるうらには、おそらく長く深い思索の積みかさねがなければなりません。それは関東におけるような、多忙な布教のなかでというよりも、越後時代のような静かで、たっぷり時間にゆとりのある時の方が、よりふさわし

せんが、時間的には廻心は一瞬とする同時瞬間的できごと、しいていえば瞬間的永劫ともいえるできごとであって、その後出る念仏は、あきらかに「和讃」にもあるように、摂取不捨されたことに対する弥陀仏への報謝の念仏であり、自身に具足する煩悩をさんげする念仏でもあるべきであります。

このことを、もっとくだいて申しますと、聖人では本願を信じることが救いそのもので、それを覚知できるのが念仏であり、その覚知は同時に死後の浄土往生への確約をいみするので、法然上人の思想では、前述のように、信心決定した以後の念仏について、正しいいみづけも解答も明らかにされていないということは、「ただ念仏して弥陀に助けられる」と信じて救いを自覚しても、死後の浄土往生はなお不確定であるため、死のきわまで称名にはげまねばならないわけです。聖人が師匠を思想的に超えたといわれるのは、この点をさすものではないかと思えます。話が理くつぽくなつて恐縮です。

(4) 関東における自信教人信の時代（42才―63才）に移りましょう。聖人は越後に流寓して五年目の建暦元（一一二一）年に赦免に浴しましたが、なお三年間、都合七年間越後にとどめられたのち四十二才のとき、越後から上野（こうづけ・群馬県）の佐貫（さぬき）莊をへて常陸（ひ

いでしようにし、この点からもその構想のあらましは越後時代に成り、それをひっさげて関東での教人信にのぞまれたものだろうと考えます。

(5) 著述時代（京都63才―90才） 聖人が関東をあとに、再び一家をあげて京都に帰られたのは、文暦二年すなわち嘉禎元（一二三五）年の鎌倉幕府による念仏禁止、念仏者追放令が直接の原因ではなからうかということ、帰洛後は生活も苦しく、やがて恵信尼公は越後に歸り、ひとり暮しになりましたが、聖人は身心ともにますます健全で、もっぱら文筆・著述にうちこみ「教行信証」の浄書もされたといわれます。歎異抄第二条にみえるできごと、帰洛されてからのことです。聖人は七十六才からは「浄土和讃」「高僧和讃」等を著わされるかたわら、関東の門弟たちとの消息（手紙）をひんばんに出されたようです。そして八十八才のとき「弥陀如来名号徳」を選述していられますが、これが最後の著述でした。それにしても、かかる老令での頭脳の明晰さといひ、精力の充実さといひ、ただ驚歎のほかはありませんが、それを支えたのは、感謝法悦の念仏による自然法爾（じねんほうに）の生活によられたものであったと思います。

聞 信 録 抄

蒼 田 豊 吉

知られたい心知られたくない心

わがよき処は人に知られたし。わが悪しき処は人に知られたくなし。知られたき心も、知られたくなき心も、其の根源は名利にあり。真に知られたのは、わがよき心と、悪しき心と共に残りなく知られた時にあり。

われは仏より真に知られおるなり。されどわれは仏より知られんことを願わず。人よりわがよき点のみを知られんことを願えり、浅間しきかな。

捨てられるのを恐れる心悲しき心

四十過ぎた女が、人に捨てられまじとて白粉にてしわを塗りかくす。実にあわれなり。白髪を黒く染むるまたあわれなり。人に捨てられまじとて無理に学問をばげみ、新知識をあさる、その心根いとふびんなり、人にこびへつらい捨てられまじとてなり。

われはすべての人に捨てられ、唯一の仏にすくわる。ここに慰安あり、宗教あり。仏にすくわれ、導かれ、喜び勇んで最後の一息まで努力す。かくて世間の取捨に超越する

なり。同じく努力するも、その心根に雲泥の差あり。一は悲しく、他はうれし。

絶対の仏と信仰

絶対は無限なり、無辺なり、不可思議なり。

絶対の仏は無限の慈悲、無碍の智慧、永劫の助力なり。

絶対の仏は常に相對の我等を見そなわして永遠に慈悲の手を垂れてうみたまふことなし。我等はこの無限の慈悲にうながされて自己の罪惡にきつき、仏の救済を感謝するなり。

信仰は吾等の相對の感情、智慧、意志によりて成るものにあらす。吾等の相對の力によるものはすえついに破れて永續することなし。

信仰とは、絶対の仏が堂々とわれら相對の胸の中に現われたまふことを自覺することなり。そこに絶対の信仰あり。絶対の安心あり。永劫にわたりて變ずることなし。われら相對の心は變りずめなれども、絶対の慈悲は不變なるゆえ、われらの信は變ずることなし。

超時間、超空間

空間も、時間も、わが心の所産なり。仏陀の生命には時間も空間もなし。釈尊も善導大師も、法然上人も親鸞聖人も皆仏陀の分身なり。これらの諸聖は仏陀と共に今わが上に慈悲の手を垂れ、愛撫し養育したまえり。方丈の室、刹那の時、億千の聖賢あつまりまします。何ぞ敬虔、喜悅の情なきを得んや。

苦悩と救済（絶対の満足）

吾等の苦悩の根源は我執の一念にあり。これを絶たずんば苦悩を脱すること能わず。

苦悩の救済の方法として世人の唱うるところをみるに、一、意志を強くせよ、猛進せよ。二、身体を強めよ。三、運動せよ。四、深呼吸せよ、静坐せよ。五、理性を明にせよ。六、運命をあきらめよ。これらの方法は多かれ少なかれ多少の効果あるべきも、畢竟、一時の鎮痛剤に過ぎず。

自己の力にては永久にわたりて意志を強くすることも、身体を健康にすることも不可能なり。疾病にかかり、老境に入り貧苦におちいる時は、意志も身体もその苦をいやすこと能わず。運命とあきらむるとも何となくもの足らぬ感を除くあたわず。

吾人のあらゆる苦悩は、絶対の慈悲に浴して始めて救済せらる。ここに絶対の満足あり。

空論と実論

信者ありて一子を失う。しかもそれによりてかえって一層信を増したるを感謝す。

ある人これを評して曰く、これ人情にあらず、信仰にしかくのごときものならばわれは信仰を欲せずと。

かかることは理論や妄想にて判断の出来るものにあらず自身が先ず信仰を得て、信仰の如何なるものなるかを体験せざるべからず。次に自身が一子を失いてその心情を体験せざるべからず。かかる実験を得てはじめて、信者にして子を失いたる者の心情を了解するを得るなり。信者たらざるもの、子を失わざるものは未だかかる問題にあれこれ言う資格なきなり。

如来の直言

われわれは時間、空間というものに迷い、如来を遠い処に眺めておる。

如来には時間も空間もない。如来は今ここに、敵としてまします。わが心の奥に入りこみたもう。如来は我に直々に説法したもう。

釈尊も、法然上人も、親鸞聖人も、その他の高僧、知識はみな現在に生きてわれに説法して聞かせて下さる。

我々は直々にこれをいただかねばならぬ。経巻は如来のみ声である。論部は高僧のお言葉である。我々はこの生き

生きた御心をおうけせねばならぬ。

曲者 毒蛇

如何に求めてもお慈悲が聞けぬ。有り難い心が起らぬ。よろこばれぬ。浅ましい心が直らぬ。何だか不快の気持ちになることがある。

こんなになるのは、わが心中に曲者（くせもの）がいるからだ。「我」という毒蛇がひそんでいるからだ。

この曲者、毒蛇を済度して下さるには仏の光明より外にない。仏は永劫の昔からの曲者、毒蛇を済度せんがためにご苦労下されている。さればわれは、何のほからいもなくお慈悲の光明に照護されつつ念仏申しさえすれば、曲者、毒蛇も正体をあらわして遂に消えてしまうものである。いな姿を転じて善鬼神となるのである。

仮の信仰と眞の信仰

仏を向うにおいてこれを信ずるは仮の信仰なり。浄土を眺めてこれに往生せんと求むるは仮の信仰なり。かくのごときは自ら仏とか浄土とかの理想をつくって、自らこれを信じ、又は求むるものなり。これらは実際の出来事に遭遇すればたちまちに碎ける。

眞の信仰は不思議の願力をいただくことなり。われら凡夫いかに仏を信ぜんとするも信じ得るものにあらず。もし眞に仏を信ずるには、こちらに清浄眞実の心を有せざるべ

からず。しかるにわれらは虚仮不実なり、いかでか仏を信じ得んや。親になりて親を知るなり、仏と同じになりて仏をも信じ得るなり、罪惡煩惱の身、なんぞ仏と同じからんや。仏の方より我等の罪惡生死に沈めるをみそなわして、

いたまらずして現在ここに來りてわれを救い給うなり。われはいつも逃げ廻わつて仏に背いておるに、仏は先にまわり、後ろに立ちてわれを救わずはおかじと苦労したまう。われ仏を信ずるにあらず。仏われを信じて捨てたまわぬなり。

仏われを信じたまうとは、わが心中をのこる限なく洞見して救いとけずはおかじとの慈悲をいう。何たる広大なるお慈悲ぞ。何たる不思議の願力ぞ。この慈悲、この願力に眞実頭の下つたのが眞の信仰なり。

この慈悲はけつして遠方にましますのではない。「阿弥陀仏ここを去ること遠からず」。近く近く苦しむ我等の心中に入り満ちたまうのである。

われらは空想的に、学理的に仏を造り仏を求むるも、万劫末代かけて救済にあずかることあたわず。唯、現下、實際の生活にて仏より救わるるなり。

南無阿弥陀仏々々。

私の詩と信仰

（註）

これはNHKラジオ「宗教の時間」に放送された太子園老人ホームでのお話です。

※

今日は、おりおりの心境を『念仏詩抄』として発表され今も武生市の老人ホームで、詩を書きつづけている木村無相さんの「詩と信仰」を御紹介いたします。木村さんは今年七十四歳、明治三十七年に九州八代のトンネル工事の飯場で生まれま

※

父が土方の親方でしたので私達一家は、父の仕事の都合で、日露戦争後の満鮮各地を転々と渡り歩いたのでした。私が高等小学校を卒業するのに、七回も転校したほどに。事情あって私は入籍されないで木村姓ですが、父は吉田といつて、とても酒好きなたった人で、背中一面に石川五右衛門が百日カヅラで、朱鞘（しゅざや）の短刀を抜いた入墨をしていました。

母は、女バクチ打ちとまでは云えませんが、大麥バクチ

木村 無相

の好きな人で、末っ子の私はよくバクチ場からバクチ場に連れて行かれて、小学校にもそこから通ったこともありま

す。巡査が来ると、子供の私までが窓から逃げ出したり、家に帰ると、至つて短気な父に「このガキまでババアと、バクチに行ったりしやがって」と、母と一緒に追い出され

て、空家に寝たりして。父と母とは、実によくケンカをしました。子供の私達姉弟が「いつそ別れたらどうか」と言うほどに。

工事中は、若い職人が何人か家に居ましたが、その人たちは、月末の勘定を貰うとすぐに、その土地・土地の女郎

を買に行くのでした。

そういう飲む・打つ・買う・夫婦ケンカ・各地転々の中で育つた私は、どうも落ちつかず、人生が不安で、生きて

いるのがイヤで「なんでこんな世の中に、生きておらんなんのだらうか」と、いつも思っていました。

満十四歳で朝鮮の平壤で高等小学校を卒業してからは、裁判所の給仕をしたり、大連の建築屋の小僧にやられたり

しましたが、結局は私一人で日本に帰って来て、神戸の県立工業学校の建築科に入学して、新聞販売店の住込みの配達員などとして、大正十三年に満二十歳でそこを卒業したのです。

おもい出 (一)

われかつて

死なんとしたる

山に来て

鳥の飛ぶ見ぬ

雲の往く見ぬ

死なんとしては

死ねざりし

二十歳(はたち)の頃の

純情も

おもい出として

なつかしき――

子供の時から、世の中の濁った中で転々として育ったので、とてもませて、すれていました。そして親の生活を批判し、世の中の奴はみな薄情だというふうに、悪いところ

いかわからない―「これはまあ、なんというヒドイ俺の根性か」と全く驚ろいて「この悪い煩惱の心を断ち切って、悟りが開きたい」と、そう思い立ったのです。

それは、神戸の県立工業学校を卒業して、東京の警視庁の建築課に勤めていた満二十歳の時のことでした。

※

その頃、すでに一家は離散、縁あってその後、鹿児島の小学校の代用教員になった無相さんは、次第に大きく重くなつて来たこの問題のために先生を辞めて、求道一筋の旅に出かけます。満州各地を放浪し、昭和四年には先輩に誘われてフィリピンの開拓地に渡り、さまざまな宗教の門を叩きます。

昭和八年、自分の問題を解く鍵は仏教の中にありそうだと気付いて、満二十九歳で日本に帰ると四国遍路をはじめます。そこで耳にした愛媛県のある寺で、三年間真言の教えを学びますが、自力の教えを受けるには自分の力が足りないことを自覚して、今度は徳島県の真宗のお寺で四年間、他力の教えを学びます。しかしそこでも自分の煩惱を除く糸口は見出せず、寺を出る決心をします。

※

寺を出てからの昭和十五年の一年間は全くスランプでした。お寺を出る時に私は「お前はとても駄目だ。なんぼ聞いても読んでも頭だけで、胸にはちょっとも受けつけない。仏法は落第だから、求道とか、聞法は止めにして、自

ばかりに眼をつけて―まあ、えらい悪いことですが、陰では、お父さん・お母さんと言わずに、ジジイ・ババアと言っていたのです。

「たのみもせんのに、こんな世の中に生んでくれやがって、自殺するなら、先ずジジイとババアを殺してから、そのあと、薄情な世の中の奴らを、五、六人は殺して死ななければ引き合わん」と、十五、六の頃には、表向きはおとなしい子と言われながら、肚(はら)ではそんなことを考えていた私でした。実にひどい性格でして―そのくせそういう自分は、さほどに悪いとは思っていなかったのです。そりゃまあ、まるきり良いとも思っていないんですけど、それは実にかすかなもので。

ところが、忘れもしない満二十歳の十一月三十日の夜のこと、ある事が縁になって、今まで外ばかりに向いていて両親や世間をあげつらうことばかりをしていた眼が、どうしたことか、一斉にパッと自分の内側に向けられてしまつて―それは決して、自分でそうしようとしてそうなったのではなくて、パッとそうなった。そうなたら、さあ大変―人を憎んだり、恨んだり、嘘ついたり、ゴマかしたり、腹立てたり、そういう色々な煩惱が、心の奥のどこからか次ぎ次ぎと現われてきて、それぞれの働きをしては、次ぎ次ぎと消えて行く。その心の奥は暗くて、どれだけ深

身の身についている煩惱だけで生きることにして、街へ出てほかの人と同じように働きなさい」と自分自身に言い聞かせてお寺をお暇して、それから、つて、を求め求めして静岡市のある個人会社の住込みの事務員になったのですが、その当時も続いて送って下さっていた三重県の松原致遠先生の個人雑誌の『無碍道』も、帯封も取らずに押入れの中に放り込んで、娯楽雑誌を読んだり、映画に行ったりの生活でした。

そうした昭和十五年の十月のある日、会社が休みで映画を観に行つての帰りに、静岡駅の前を通りかかった時、全く思いもかけずフツと、「生死出離」ということは、南無阿弥陀仏と、今ここにすでに成就されているではないか!」という声が閃めいたのです。私は愕然として思わず立ち止まってしまったのです。寺を出てからの一年間は、仏法についてのこととはぜんぜん考えたことが無かったのです。すくなくとも意識的には―。

しかし、心の底ではやっぱりそのことが問題であったのか、問題にしていって下さったお方があって、眼を離さないでいて下さったからか「生死出離」ということは、南無阿弥陀仏と、今ここにすでに成就されているではないか!」とフツと来るものがあった、「ああ、これはこうしては居られん。南無阿弥陀仏について、真剣に聞かせて貰わねばい

かん」と思い立ったのでした。

※

再び法を聞く決心をした無相さんが、今度教えを受けることになったのが、松原教遠さんのお寺でした。

※

松原先生には、昭和十六、七年とマル二年お膝元で育てをいただいたのですが、先生はお若い時はかなりご気性の強いお方だったとのことですが、それだけに、その業の深い深い中から現われて下さるお念仏は、まことに身にしみるものがあり、それはそれは常念仏の尊いお方でした。先生は、毎月講演や御法話の旅へ出られて、ご在寺は月のうち僅か一週間ほどでしたが、私は先生の御在寺中はどこへでもついて行くのでした。お便所へでも―それは、いつも御法のことしか念頭にないお方でしたから、ついでさえ行けば「木村さん、この弥陀の名号称えつつの、つづはなあ」というふうに、その時々のお味わいを、独り言のように言ってお聞かせ下さるのでした。

それはそれは、お念仏に聞き入るような御態度での常念仏のお方でして、御自坊の本堂でのお説教の時も、「ここはお念仏の道場ですから、世間話しは家ですることにして、ここではお念仏を申して下さいよ」と仰言るので、お詣りの人達もお説教の間には、ナンマンダブ・ナンマンダ

ブと静かにお念仏を申しながら、次ぎのお説教を待つのでした。

私も真言時代からお念仏だけは口についていましたからお念仏はいつも申すのですが、煩惱とお念仏との関係がつかないもので、ただ声に申すだけで、お念仏の味わいはわからないのでした。お念仏申すと、ちょっと信者らしくてカッコいいんですが、自分でわかりますものねえ。お念仏と自分が溶け合っていないということが―道がついておらんです。

先生も見ると見かねたんでしょうねえ。奥さんも女中さんも居ないある日のこと、おかずは用意してありましたから、先生と二人で風食を済まして、先生はナンマンダ・ナンマンダと御自分の書斎に行ってしまうわ、私は洗った茶碗・皿を茶の間の水屋に向って坐って、ナンマンダ・ナンマンダと片づけていましたら、書斎の方から先生がバタバタと走るようにやって来られて、私の後ろに立たれたかと思うと、驚くような劇しい大きな声で「名号とは？」とおっしゃった。そこで私が思わず反射的に大声で、「功德！」と、お答え申したら「いや、智慧じゃ」と、叩きつけるように言い捨てて、先生はまた書斎の方に、ナンマンダ・ナンマンダと行ってしまわれたのです。そこで私、ひどく考えさせられましたね。「俺がお念仏

を功德として称えているので、先生がやりきれんで、教えに来て下さったんだなあ」と―それから後はずっと、そのことについて考えさせられたんですが、先生の処にお世話になっっている間は「いや、智慧じゃ！」が、わからなかったのです。

聖人も『唯信鈔文意』に、「この智慧の名号を濁悪の衆生にあたえたまえるなり」と仰言って下さっているのに―

※

南無阿弥陀仏の名号が、煩惱に苦しむわが身をお助け下さるといふ味わいが、三十路の中ばを越えても、無相さんにはどうしても受けとれず、再び若い頃学んだ真言の道を求めて、今度が高野へ登ります。そこで高野山大学で勤めながら法を聞き、行もしますが、ここでも迷いが消えず、行の途中で山を降りてしまします。

※

おもい出 (二)

生き死にの

道にまどいて

来し聖山(やま)に

深雪(みゆき)降るなり

空ふかきより

高野の山に

のぼれども

ころろ空しく

くだりたる

わが若き日の

かなしみも

この齡(とし)にして

なつかしき―

※

高野山を降りて、再び浄土の教えを聞きはじめますが、またまた数年にして真言の教えにひかれ、再び高野山に登って、今度には真言の道場で行学しますが、二十歳の時の問題を追求しているうちに三十年が過ぎ、もう五十の坂を越える年齢になりました。

※

慵 慢

//そうやって

聞き歩くのもよいが

鯛(たい)にも骨がある

身だけいただかれよ
能信院師のおんさとし

〃鯛ならよいが

鯛（いわし）だったら

どうしましょう〃

これを傲慢というのでしう

〃邪見傲慢 悪衆生

信楽受持 甚以難〃

これは能信院師の語録にあったお言葉ですが、私はどんな好いお方に会っても、骨ばかりをあさって、身はただこうとしない、ひどい根性です。

〃鯛ならよいが、鯛だったらどうしましょう〃身だけいただけといわれるが、私の会った人が〃鯛だったらー〃というわけで、それはまことに傲慢なものです。表向きだけは殊勝げに「どうか、お聞かせ下さい」と言うんですがー。

ちょうど、今朝拝読した聖人の『唯信鈔文意』の中に、
〃心口各異〃というお言葉がありました、口で言うことと、肚の中で思っていることがまるで違ふ。

〃邪見傲慢悪衆生、信楽受持甚以難〃といいますが、その

邪見な根性をかかえながら、わが力で信心を得てたすかうというのですから、随分、盗人たけだけしい話です。しかもそれを、性コリもなく何十年となく繰りかえして――。

続 く

和歌抄

清水清吉

子等もなくはらからもなき身にしあれば法の友だちあり
がたきかな

ひたすらにただ念仏を唱えなんなる行末のことなおもひ
そ

大願の舟はあはてる要もなしゆられるままに風のまにま
に
(辞世の歌)

おかげさま

まつもと・ときお

おかげさまで

今日一日を過ごさせていただいた

ふりかえってみれば

みなおかげさまだ

今日あることも

昨日あったことも

明日もまた

おかげさまで生かさせて

いただくことだろう

すぎ去った長いあとをふりかえると

つらいこと

淋しいこと

悲しいことも

いろいろあった

だがそれらのことどもも

おかげさまで

今日を生かさせていただく

もとであったと思えば

おのずから消え去って

ただおかげさまと

手を合わせるばかりだ

なむあみだぶつ

法信抄

――先師、同友、次々と先立たれ、うたた寂寥をおほえますが「ただ念仏のたのもしさ」に勇気づけられ、今日一日を過ごさせていただいております。

先日、フト「おかげさま」ということが心に浮んでまいりましたので、文字にしてみました。

御笑覧下さい。

時下向寒のみぎり、何卒お大事にと念しております。

昭和四十九年十一月十一日

ときお

不請之友

花田正夫

大無量寿經には「諸々の衆生のために不請之友となつて迷ひ続ける者を背に負うて下さる」とあり。

勝覺經には「あまねく衆生のために不請之友となつて大悲をもつてこれを慰めあわれんで下さる」とある。

聖徳太子はこれを説明されて、「世間の友は請（もと）めてはじめて力になつてくれるが、如来は、請めもしないのに向うから友となつて下さるから不請之友と云われる」と仰言っている。

私は六高の時代に、池山先生をたずね、仏様はどんな方ですかと、仏教の知識のないまま、打ち明けておたずねした。すると、即座に、

「今ここに、幼い児が、線路の上に這いあがつて、青い石、赤い石、丸い石、四角な石と拾ひ集めて遊んでいるとする。遠くを見ると汽車が段々近よつて来ているが、子供には危ないこともわからず、平気で遊んでいる、これを見出したらどうするか」と聞かれた。勿論、あぶないと云います、と申すと、

「子供にはそれが分らぬから出ようとしないう。するとどうするか」

と重ねて聞かれたので、危険をおかしても子供を抱きあげて安全な所へ出しますと申すと

「その子供こそわれわれである。無常の汽車が近づいても驚きもせず、朝から晩までよいのわるいのと遊びたわむれているが、人間同士でもそのまま見ておられぬ、今大きなさとりを得られた仏様はあらゆるでだてをめぐらして、安全な世界に導き入れようとしていられる。」

と、いわれた。私は、如何にもこの愚かな子供こそ自分であると知らされ、仏様の御慈悲をうなづかされた。

五十余年前におききした問答を、今ここに想いおこし、不請之友の御恩をあらためて仰いだ。

求めようとせぬ原因（一）

川柳に、あたらし世をほとけになすな花に酒、とある。花よ酒よ、飲め歌えと、煩惱に酔いしれている樂天家の句とも思えるが、逆にそれを諷刺して、警告したものともとれる。

る。

かえりみるのに、我々の生活は、煩惱満足ばかりにかかりはて、自分の都合のわるい災禍とか無常を拒否し、自分に自信がもてなくなると、神仏に向つて、家内安全、息災延命、商売繁昌、入学祈願、等を願つて、勝手に神仏はその欲望をかなえて下さるときめて手を合せている。

今度成田空港の過激派の襲撃事件があつて三月三十日の開港が延期されたが、三月三十日は「大安」の日で、開港日ときめたものの、航空会社の都合で運航開始日は四月二日に切り離された。今度は色々の事情から五月十四日（日曜日）「大安」に開港になろうとの運輸省の見方であると、朝日新聞のトップ記事で報じている。それも二十日の大安日になった。

これは極く最近の例であるがこうしたことが世間の常識にまでなっていることはまことに悲しいことである。禅家は「日々是れ好日」とか「随所に主となる」と云い。浄土真宗では「平生業成」の大安心境を教えられる。親鸞聖人の愚禿悲歎述懐和讃に

五濁増のしるしには、この世の道俗ことごとく
外儀は仏教のすがたにて内心外道を帰敬せり
かなしきかなや道俗の良時・吉日えらばしめ
天神地祇をあがめつと占・祭祀つとめとす

と、あるが、聖人の御目にも、そうしたことには迷う者への慈悲の涙が一杯あふれている。

徒然草に兼好法師は、どんな老人でも家に主人が居れば挨拶なしには出入りできぬが、山中の空家には狐狸が自由に出入りする。と警告し、心に主（あるじ）を持ってと教えている。

求めようとせぬ原因（二）

こうした迷ひは、自己を知らぬところからおこる。譬えると、自分が四尺しか飛べぬと知っている、五尺の河を越えるには橋をかけるし、三尺の河はそのまま飛びこえることが出来る。

ギリシャの古代から「汝自身を知れ」とデルフィの宮殿に掲げられているけれど自己を知る人は少ない。釈尊はこれを「刀はどんなに立派でも刀自身を切ることが出来ぬ、鏡はものをよく写すが自分自身を写し得ないように、如何なる智者も身辺三尺は暗闇である」と説かれていた。

孔夫子は「十指の指差すところにしたがい」と自分を知り難い者は、多くの人の意見をきいて歩むようにと勧めている。多くの人の見るところは割合に正鵠であるが、絶対に正しいとはいへぬ、時は移り所はかわるものだから。

ここに、大円明鏡と称えられる、仏陀のさとり眼にうつる我々の姿を聞かねばならぬ。

大無量寿經の下巻、三毒段・五惡段に、縁にふれて造る我々の罪の実態があげられている。觀無量寿經では、煩惱具足の身が悪縁にふれて十惡・五逆の罪を重ね、慚愧の心もない有様を説かれている。阿弥陀經では、五濁惡時、惡世界、濁惡邪見の惡衆生と呼びかけられている。この他、法華經などをひもといてみれば、我々の愚鈍さがいたるところに示されている。

私は数年前手乗り文鳥を飼育していた。大分馴れた頃、いたずらして鏡の前におくと、文鳥はそこに写る自分の姿がわからず、呼びかけたり、攻撃したりするので、それはお前の姿だよと知らそうとしても、方法がなかった。聞けば鮎も川底に鏡を入れると、そこにうつる自分を侵略者と思つて猛烈に攻撃する由である。

これを見聞するにつけ、我々は仏智の鏡によつて、その実態を照らし出されているのに、それが自分と思えないとは、文鳥や鮎と同じおろかさであると強く省みさせられたのである。

仏教の説話にも、酒好きの主人が酒樽を買いこんで、二階にかくしてそれをたしなんでいた。妻君はどうも二階から主人がおりてくると上機嫌になるのが不審で、そこをしらべると樽があった。その蓋をとつてのぞくと、酒樽に自分の顔が写つたので、主人はかくし女を持っていたと怒りに、仏陀の慈悲の照らしに自分の暗い影が見えてくるのである、近角常音先生がよく言われた。「惡人が惡人と頭を下げるものじゃない。如何なる惡人もお見捨てないお慈悲がとどいて、はじめて私が惡人でしたと慚愧する」と。

誰もよく知っている姥捨山の話も、捨てられながら、また姥はすでに山で死ぬ覺悟をして、その覺悟をし乍らも、捨てる子のために枝折りをせずいられたかったのである。この身を捨てて我が身に注がれる親心を知つて、子供は大懺悔するのである。

目なし、足なしで何時までたつても、何処まで行つても浮ぶ瀬のない我々を仏はかねてしろしめして、たすけんという大願をおこして下さつたのである。

四十三歳の時、念仏の元意を得られた法然上人は、「一心専念弥陀名号、一順彼仏願故の文に至つて、善導の元意を得たり。歡喜のあまりあたりに聞く人なかりしかども、予が如き下機の行法は、阿弥陀仏の法藏因位の昔、かねて定めおかるをやと、高声に唱えて、感悅隨にとおり、落涙千行なりき。」

と聖覺法印に語られている。
親鸞聖人は、念仏がよろこべず、淨土がこいしく思えぬ唯円房に「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰言り、煩惱興盛の身をことにあわれんで下さる」

樽をこわしたが無も出て来なかつた、というのがある。

心の錯覺

眼に錯覺のあることは一寸注意すればすぐわかるけれどこれは、薬でも眼鏡でも調節が出来ぬ。今心にも身びいきな心があつて、正しく見ることが出来ぬ。入学試験の成績も自己採点では二割ほど引かねばならぬ。又自分に都合の悪いこと、老いとか死とか、惡とか愚は、極力拒否して、自我の城壁を造っている。

又、人に対しても本當の慈悲心があれば、相手を善導することも出来るが、我々の親切心は、バケツの水を植木にやるのと同様に、すぐ空になつてしまふ。道成寺鱗が肌のぬぎ仕舞と、あるように、しまいには蛇となつて焰を吹きかけるのが落ちてである。

「盲目なく、行足なし」と古聖が慚愧していられるように、盲で蹇(あしなえ)の身を知らされるのであるが、さして顔についた墨なら洗えばおちるけれど、泥ばかりの身はどんなに洗つても泥ばかりで、どうにもこうにも始末がつかぬ。聖人が「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と仰言つたその片鱗にふれるのである。

仏かねてしろしめして

古句に「松蔭のくらはきは月のひかりかな」とあるよう

と、我々の全煩惱をすべて御照鑑下さつて、ことに憐んで下さる大悲大願の至極を唯円房と共に渴仰されている。

近角常音先生は、阿闍世のために涅槃に入らずの心を、このこころ、これを阿闍世とのたまいて、

見捨てじという慈悲なりしか

と、わが御身にうけてのおよろこびであつた。

何時も申し上げるように、私の右の親指が曲つている、又、私は人一倍反抗心が強い、そのために父の心配は大変なものであつた。七十四のこの年になつて、この不具の親指と、折にふれてとび出す反抗心の鬼心にふれては、そこが亡き父に遭うよい名所となつてゐる。同時に、事毎に失敗し、眞実のさとりも得られない、煩惱熾盛な業苦の中に、み仏の悲心を仰ぎ仰ぎ一日一日とすごしている。

最後に、白井成允先生のお歌を掲げ、結ばせて頂く。

幾山河すぎこし跡のここしきに　ほのぼのと照るおん光かも

みほとけのみちかひきけばひとのよの　ここしき山もこゆるたのしみ

わが涙つくるときなしみほとけの御名を聞きつつ生きてしゆかん

あとがき

残暑御見舞申上げます。

お盆の行事も済まされたことでしょう。私は眞言宗の在家に生まれましたので祖父が迎え火、送り火を掲げて、丁寧にお祭りをしたことを覚えております。また目蓮尊者の亡き母との物語りも聞き覚えております。それにつけても、今は亡き人々からこうむった御恩のしのばれることであります。

今月は近常音先生の御忌月でありますので、御晩年の御郷里での御法話で大字様の筆録をいただきました。

又「歎異抄のすすめ」は田村さんの御仕事に忙しく時間が無くなられたためしばらく筆を休められます、いづれまた時を待って御執筆下さることを願っております。

菅田様の「聞信録抄」は、京都市左京区高野泉町四〇文明堂出版です、定価一二〇〇円送料一六〇円であります。

振替口座、京都七七三四番。

木村無相さんの「私の詩と信仰」は、ラジオの宗教の時間に放送されたものに、更に加筆の上、在家仏教誌に掲載されたもの、の前です。又幸に木村さんは七月六日に無事退院されました。何よりよろこばしいお知らせであります。

また松本解雄様のかつてのお手紙を見出し、かかげさせていただきました。かえすがえすも惜しい人を失いましたことです。私の歎異抄のわが身読記も、松本様の愛媛大学時代の教え子の亀岡邦生さんの御世話によって、柏樹社で出版して下さったものです。

十五年来、慈光の誌友となつて下さっている方から、御礼やらお別れの手紙をいただきました。

三月に内科で総合病院に入院し、不治の病と診断され、自宅療養するようにとすめられ、退院し、今では御法を唯一の良薬として一日一日を大事に生きさせて頂いております。ありがたく思うことばは書き取り子や孫にのこしてやりたいと思っております。貧乏で残してやる物は何もありませんが御法だけは相続してもらいたいと念願しております。今や生死巖頭に立たされて、本当に開法の大切さも知らされ、親様お一人にみとめられて心強さ、しあわせをよこさるご念仏させて頂いております云々（抄出）

と、死の宣告を念仏裡にうけとめられて生死の海を超えていられる姿に大きな教えをいただきました。

急告

八月一杯休ませていただきましたが、九月からは私の家での一国会を、第一、第三日曜の午後一時半から開かせていただきます。身体が老化したしまして疲れますので、第二日曜は休ませていただきます。

（御案内）

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一国会例会。

市バス、新堀通り一丁目下車。

東入る三筋目左入る。花田宅。

地下鉄、新堀橋下車。名鉄呼続下車。

又は本笠寺下車、市バス乗りつき。

○毎月二十四日、午前、午後。

昭和区小松町、教西寺法話会。

市バス御器所通り下車、又は北山下車

○毎月七日午後（日曜には変更）

尾西市三条板倉、蓮光寺修道会。

新一宮よりバス、西三条下車

定価 半年 七〇〇円（送共）
一年 一四〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駄上町二ノ八八

印刷 坂部 光雄
愛知県西加茂郡三好町大字稲谷

発行所 慈光社
名古屋市南区駄上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号四五七